

### マーラー：交響曲 第3番

6つの楽章からなり、演奏に100分近くを要するマーラー最長の交響曲。作曲時、ハンブルクの歌劇場で指揮者を務めていたマーラーは、信仰に関する問題で悩んでいた。ウィーンへの進出を強く願っていた作曲家は、カトリックの都でポストを得るために、ユダヤ教からの改宗を迫られていたのだ。マーラーは当時、ドストエフスキー、ショーペンハウアー、ニーチェらの著作を耽読していた。特に、“神は死せり”の警句や、“永劫回帰”を打ち出したことで知られるニーチェの『ツァラトゥストラはかく語りき』は、生の絶対的肯定、言い換えると、キリスト教的ドグマ(教理)からの解放を謳っており、マーラーは生や自然を讃歌するそうした新たな世界観に強く惹かれていた。

第1楽章は8本のホルンによる豪壮なユニゾンで始まる。この旋律は、ブラームスの交響曲第1番の終楽章との類似が指摘されてきた。ワーグナー派とブラームス派が確執を続けるウィーンにあって、マーラーは一方の領袖ブラームス本人にポスト獲得への援助を仰いだ。この冒頭部分を“牧神パンの目覚め”と作曲家は称しており、恩人ブラームスへのリスペクトを感じさせる。序奏の後、暗澹たる雰囲気の中で警告のラッパが鋭く吹き鳴らされる。やがて闇を打ち破るかのように、抒情的な旋律をともなった快活なマーチが沸き上がる。生命の夏を象徴するバッカス神(デュオニソスのローマ神話版)の行進だ。人間の王たちを暗喩するトランペット群に対して、唯一神(キリスト教の神)を象徴するトロンボーンがソロで思慮深い旋律を奏でる。しかし軽快かつ勇壮に行進するバッカス神は圧倒的だ。そして牧神はふたたび目覚め、闇が覆い、唯一神が語り、また諧謔的なマーチが始まる。まさに永劫回帰の音楽的表現と言えよう。

「緩-急」が繰り返されるメヌエットの第2楽章は、ブルックナーからの影響が顕著とされる。だが、この執拗な繰り返しもまた、永劫回帰を象徴する手法と考えられる。

第3楽章はスケルツォ。歌曲「夏に交代」(《若き日の歌》)をもとにした音楽は、ナイチンゲールとカッコウが歌い交わす。騒々しいほどに夏の生を謳歌する鳥獣たち。そこにポストホルンのしめやかな歌が挿入される。歌曲「美しいトランペットが鳴り響くところ」(《子供の不思議な角笛》)は、戦死者の幽霊が恋人のもとを訪れる夜を描く。死者は“いまや緑の大地こそが我が家”と告げる。音楽は突然、交響曲第2番《復活》からの引用を雄々しく奏で、圧倒的な高揚感で終わる。

第4楽章はアルト独唱により『ツァラトゥストラ』の章句が歌われる。それは“快樂は深き永遠を欲すのだ!”という、後年の《大地の歌》のエンディング「永遠に、永遠に…」を先取りした、これまた永劫回帰への憧憬である。

第5楽章はアルト独唱と女声合唱、少年合唱が「三人の天使が優しい歌をうたっていた」(《子供の不思議な角笛》)を高らかに唱和する。「ビム、バム」と少年たちが教会の鐘の音を模して歌う姿は微笑ましいが、作曲家は「生意気に」との指示を与えている。

これは、キリスト教的な救いをシニカルに歌うことで、それを皮肉っているともとれる。  
(ちなみに、ここで引かれている「三人の天使～」の原詩の題名は「哀れな子供の乞食の歌」である)。

第6楽章はバッカスの快活な行進とは対照的に、踏みしめるようなテンポで進む、永遠のレント。うねるような弦楽器の響きに全てが浄化されていく。この楽章を覆うニ長調の“D”は Domine、すなわちキリスト教の唯一神を暗示しているという説もあるが、この交響曲に限っては、Dionysos (デュオニソス) の D では？ さて、音楽は長いクレシェンドを経て、ティンパニーの C 音と D 音の連打で歩みを終える (R.シュトラウスは交響詩《ツアラトウストラはかく語りき》の冒頭で自然音とされる C と G を連打させた)。マーラーはこの第6楽章のあと、さらにアルト独唱による楽章を据えることを考えていた。しかし結局、その楽章は次作、交響曲第4番の終楽章(「天上の生活」)に転用された。やはりこの曲は、圧倒的なニ長調と自然音の連打で終わらなければならなかったのだろう。